

らる。

○榮螺山古墳

此の古墳は、伴氏下邸内にありて、象眼町の往來脇也。墳上に雜木・藤など生ひ茂り、世人榮螺山と呼べり。龜尾記に云ふ。榮螺山の古塚は、伴氏慶長中下邸拜領なき以前よりありて、由來あるべき墳墓なりしかど、其の傳説絶えて詳かならず。をしむべし。とあり。思ふに、此の古墳はいにしへいかなる貴人の墳墓なりけん。白樂天の詩に、古墓何代人不知姓與名、化作路傍土。年々春草生。とはかゝる古墳をいふなるべし。徒然草にも、人のなきあとばかりかなしきはなし。跡とふわざも絶えぬれば、何れの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あるらん人はあはれと見るべきを、はてはあらしにむせびし松も、千とせをまたで、薪にくだかれ、ふるき塚はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。と書き置けるは、信にさることなるべし。

○象眼町

此の町名は、寛文十年の九十歳者書上帳に、象眼町日角取

甚七郎が事を記載し、元祿三年の火災記其の外元祿・享保頃の記録共に、皆象眼町とありて、ザウガン町と呼びたりしを、後呼び誤りて、今は世人ザウガネ町といへり。或は云ふ。此の町は昔象眼師共の邸地に賜はり、爰に居住せし故に、町名とは成りたるならんといへり。

○加賀象眼事略

和訓栞に云ふ。さうがんは、榮華物語にさうがんうす物と見ゆ、侍中群要に下襲夏象眼と見ゆ。うすものゝ名なりといへり。古今著聞集にふた藍のさうが又ふかみどりのさうがなどいへるも是成るべし。刀劍の具などにいふは藏嵌の字なるべし。又鑲眼なりともいへり。とあり。抑、象眼は何れの時代より歟、加賀國の名産とはなしける故に、加越能名物往來といへるものにも象眼鐙・鏢・小柄などを載せたり。中にも象眼鐙は當國の名物となし、舊藩中は幕府への献備品の第一にて、臨時進献せられ、諸藩主への進物にも成りたり。故に明曆三年丁酉の江戸火災の節、大火之由小松へ聞えければ、利常卿其の儘八幡久越を以て、御道具奉行松本次郎左衛門へ被仰渡、金澤に於て象眼鐙千足出來被

命と、微陽兩公遺事にあり。國初の頃は過分に采地を賜はれる象眼師も召抱えられたり。寛永四年の土帳に、百五十石象眼屋今村平兵衛と見え、藩國官職過考に、鐙象眼師勝木市郎右衛門六世の祖權太夫は、瑞龍公の時知行百五十石を賜はり、御國象眼細工仕初め、寛永元年に象眼鐙二足幕府へ献上せらる。台徳將軍家天下太平吉例の國産也とて、以後まで所望し給ひ、弟子三十八人各、五十俵宛賜はり、象眼鐙御用を勤む。是起原なり。五世の祖權太夫萬治二年十五人扶持賜はり、鐙御用棟取と成り、代々勤之。天明四年六月廿八日勝木市郎右衛門等初て細工者並に命ぜられ、切米四十俵宛賜はり、市郎右衛門へは外に八人扶持下さる。

とあり、右勝木市郎右衛門が由緒書に載せたる如くならば、利長卿の時勝木權太夫をば扶持せられしより、加賀象眼細工初りて、象眼鐙は寛永元年より幕府への進献物となりし事知られけり。十二冊定書會所條目部に、御國名物三品御献上方、延享二年は御手綱、同三年は大奉書、同四年は御鐙也。御手綱布越中出來、染金澤。大奉書は河北郡二俣村に而漉上。御鐙は御細工所に而出來。但し最初は町之

象眼師共罷出、一統仕處、其内兩人御細工人並に被召抱、御献上之分迄御細工所に而仕、御進物之分は町細工人一統に被仰付。繪形等於御用所極り、町會所を遣し、直段相極候。細工人名前。

- 金子 市兵衛
- 守良 惣右衛門
- 永次 豐次
- 氏屋 市郎齋門
- 國久 與右衛門
- 國廣 與左衛門
- 永直 傳次
- 倫由 權左衛門
- 倫常 宇兵衛

右は町細工人にて、金澤市中に居住し、象眼鐙等を細工なしける者共にて、延享の頃存命せし細工人の名前也。

○鍛冶町

龜尾記に、鍛冶町はもと安江鍛冶町と呼びたるを、今は安江の二字を省きたり。といへり。平次按ずるに、安江村の